

# ツエねずみ

宮沢賢治

青空文庫



ある古い家の、まっくらな天井裏に、「ツエ」という名まえのねずみがすんでいました。ある日ツエねずみは、きよろきよろ四方を見まわしながら、床下街道ゆかしたかいどうを歩いていきますと、向こうからいたちが、何かいいものをたくさんもって、風のように走って参りました。そしてツエねずみを見て、ちよつとたちどまって早口に言いました。

「おい、ツエねずみ。お前んとこの戸棚とだなの穴から、金米糖こんべいとうがばらばらこぼれているぜ。早く行つてひろいな。」

ツエねずみは、もうひげもびくびくするくらいよろこんで、いたちにはお礼も言わずに、いつさんにそつちへ走つて行きました。ところが戸棚の下まで来たとき、いきなり足がチクリとしました。そして、「止まれ、だれかつ。」と言う小さな鋭い声がします。

ツエねずみはびっくりしてよく見ますと、それは蟻ありでした。蟻の兵隊は、もう金米糖のまわりに四重の非常線を張つて、みんな黒いまさかりをふりかざしています。二三十匹は金米糖を片っぱしから砕いたり、とかしたりして、巢へはこぶしたくです。ツエねずみはぶるぶるふるえてしまいました。

「ここから内へはいつてならん。早く帰れ。帰れ、帰れ。」蟻の特務曹長とくむそうちょうが、低い太

い声で言いました。

ねずみはくるつと一つまわって、いちもくさんに天井裏へかけあがりました。そして巢の中へはいつて、しばらくねころんでいましたが、どうもおもしろくなくて、おもしろくなくて、たまりません。蟻ありはまあ兵隊だし、強いからしかたもないが、あのおとなしいために教えられて、戸棚とたなの下まで走って行って蟻ありの曹そうちよう長ちやうにけんつくを食うとは、なんたるしやくにさわることだとツエねずみは考えました。そこでねずみは巢からまたちよろちよろはい出して、木小屋の奥のいたちの家にやって参りました。

いたちはちようど、とうもろこしのつぶを、歯でこつこつかんで粉にしていますが、ツエねずみを見て言いました。

「どうだ。金米糖がなかったかい。」

「いたちさん。ずいぶんお前もひどい人だね。私わたしのような弱いものをだますなんて。」

「だましゃせん。たしかにあつたのや。」

「あるにはあつても、もう蟻が来てましたよ。」

「蟻が、へい。そうかい。早いやつらだね。」

「みんな蟻がとつてしまいましたよ。私のような弱いものをだますなんて、償まどうてください

い。償うてください。」

「それはしかたない。お前の行きようが少しおそかったのや。」

「知らん、知らん。私のような弱いものをだまして。償うてください。償うてください。」  
「困ったやつだな。ひとの親切をさかさまにうらむとは。よしよし。そんならおれの金米糖をやろう。」

「償うてください。償うてください。」

「えい、それ。持つて行け。てめえの持てるだけ持つてうせちまえ。てめえみたいな、ぐにやぐにやした男らしくもねえやつは、つらも見たくねえ。早く持てるだけ持つてどっかへうせろ。」  
「いたちはプリプリして、金米糖を投げ出しました。ツエねずみはそれを持てるだけたくさんひろつて、おじぎをしました。いたちはいよいよおこつて叫びました。」

「えい、早く行つてしまえ。てめえの取つた、のこりなんかうじむしにでもくれてやらあ。」

ツエねずみは、いちもくさんに走つて、天井裏の巢へもどつて、金米糖をコチコチ食べました。

こんなぐあいですから、ツエねずみはだんだんきらわれて、たれもあんまり相手にしな

くなりました。そこでツエねずみはしかたなしに、こんどは、柱だの、こわれたちりとりだの、バケツだの、ほうきだのと交際をはじめました。中でも柱とは、いちばん仲よくしていました。

柱がある日、ツエねずみに言いました。

「ツエねずみさん、もうじき冬になるね。ぼくらはまたかわいてミリミリ言わなくちゃならない。お前さんも今のうちに、いい夜具のしたくをしておいた方がいいだろう。幸いぼくのすぐ頭の上に、すずめが春持って来た鳥の毛やいろいろ暖かいものがたくさんあるから、いまのうちに、すこしおろして運んでおいたらどうだい。僕の頭は、まあ少し寒くなるけれど、僕は僕でまったくふうをするから。」

ツエねずみはもつともと思いましたが、さつそく、その日から運び方にかかりました。ところが、途中に急な坂が一つありましたので、ねずみは三度目に、そこからストンところげ落ちました。

柱もびつくりして、

「ねずみさん、けがはないかい。けがはないかい。」と一生けん命、からだを曲げながら言いました。ねずみはやつと起き上がって、それからかおをひどくしかめながら言いまし

た。

「柱さん。お前もずいぶんひどい人だ。僕のような弱いものをこんな目にあわすなんて。」  
柱はいかにも申しわけがないと思ったので、

「ねずみさん、すまなかつた。ゆるしてください。」と一生けん命わびました。

ツエねずみは図にのつて、

「許してくれもないじゃないか。お前さえあんなこしやくなさしずをしなければ、私はこんな痛い目にもあわなかつたんだよ。償<sup>まど</sup>つておくれ。償<sup>まど</sup>つておくれ。さあ、償<sup>まど</sup>つておくれよ。」

「そんなことを言つたつて困るじゃありませんか。許してくださいよ。」

「いいや、弱いものをいじめるのは私はきらいなんだから、償<sup>まど</sup>つておくれ。償<sup>まど</sup>つておくれ。さあ、償<sup>まど</sup>つておくれ。」

柱は困つてしまつて、おいおい泣きました。そこでねずみも、しかたなく、巢へかえりました。それからは、柱はもうこわがつて、ねずみに口をききませんでした。

さてそののちのことですが、ちりとりはある日、ツエねずみに半分になつた最中<sup>もなか</sup>を一つやりました。するとちようどその次の日、ツエねずみはおなかが痛くなりました。さあ、

いつものとおりツエねずみは、まどつておくれを百ばかりも、ちりとりと言いました。ちりとりもあきれて、もうねずみとの交際はやめました。

また、そののちのことですが、ある日バケツはツエねずみに、せんたくソーダのかけらをすこしやつて、

「これで毎朝お顔をお洗いなさい。」と言いましたら、ねずみはよろこんで次の日から、毎日それで顔を洗っていました。そのうちにねずみのおひげが十本ばかり抜けました。さあツエねずみは、さつそくバケツへやつて来て、償<sup>まど</sup>つておくれ償つておくれを、二百五十ばかり言いました。しかしあいにくバケツにはおひげもありませんでしたし、償うわけにも行かず、すっかり参つてしまつて、泣いてあやまりました。そして、もうそれからは、ちよつとも口をききませんでした。

道具仲間は、みんな順ぐりにこんなめにあつて、こりてしまいましたので、ついにはだれもツエねずみの顔を見るといそいでわきの方を向いてしまふのでした。

ところがその道具仲間に、ただ一人だけ、まだツエねずみとつきあつてみないものがありました。

それは針がねを編んでこさえたねずみ捕<sup>と</sup>りでした。



ねずみ捕りは全体、人間の味方なはずですが、ちかごろは、どうも毎日の新聞にさえ、猫ねこといっしょにお払い物という札をつけた絵にまでして、広告されるのですし、そうでなくとも、元来人間は、この針金のねずみ捕りを、一ぺんも優待したことはありませんでした。ええ、それはもうたしかにありませんとも。それに、さもさわるのさえきたないようにみんなから思われています。それですから実は、ねずみ捕りは人間よりはねずみの方に、よけい同情があるのです。けれども、たいていのねずみはなかなかこわがって、そばへやつて参りません。ねずみ捕りは、毎日やさしい声で、

「ねずちゃん、おいで。今夜のごちそうはあじのおつむだよ。お前さんの食べる間、わたしはしつかり押えておいてあげるから。ね、安心しておいで。入り口をパターンとしめるよ。うなそんなことをするもんかね。わたしも人間にはもうこりこりしてるんだから。おいでよ。そら。」

なんてねずみを呼びかけますが、ねずみはみんな、

「へん、うまく言ってるあ。」とか、

「へい、へい。よくわかりましてございます。いずれ、おやじや、せがれとも相談の上で。」とか言ってるそろそろ逃げて行ってしまいます。

そして朝になると、顔のまつ赤な下男げなんが来て見て、

「またはいらぬ。ねずみももう知つてゐるんだな。ねずみの学校で教えるんだな。しかしまあもう一日だけかけてみよう。」と言いなから、新しいえさととりかえるのでした。

今夜も、ねずみ捕りは叫びました。

「おいでおいで。今夜はやわらかな半ペンだよ。えさだけあげるよ。大丈夫さ。早くおいで。」

ツエねずみが、ちょうど通りかかりました。そして、

「おや、ねずみ捕りさん、ほんとうにえさだけをくくださるんですか。」と言いました。

「おや、お前は珍しいねずみだね。そうだよ。えさだけあげるんだよ。そら、早くお食べ。」

ツエねずみはパイツと中にはいって、むちやむちやむちやつと半ペンを食べて、またパイツと外へ出て言いました。

「おいしかったよ。ありがとう。」

「そうかい。よかったね。またあすの晩おいで。」

次の朝、下男が来て見ておこつて言いました。

「えい。えさだけとって行きやがった。ずるいねずみだな。しかしとにかく中にはいったというのは感心だ。そら、きようはいわし鯛だぞ。」

そして鯛を半分つけて行きました。

ねずみ捕りは、鯛をひっかけて、せっかくツエねずみの来るのを待っていました。

夜になって、ツエねずみはすぐ出て来ました。そしていかにも恩に着せたように、

「今晚は、お約束どおり来てあげましたよ。」と言いました。

ねずみ捕りは少しむっとしたが、無理にこらえて、

「さあ、食べなさい。」とだけ言いました。

ツエねずみはピイツとはいって、ピチャピチャピチャツと食べて、またピイツと出て来て、それから大風おおふうに言いました。

「じゃ、あした、また、来て食べてあげるからね。」

「ブウ。」とねずみ捕りは答えました。

次の朝、下男が来て見て、ますますおこつて言いました。

「えい。ずるいねずみだ。しかし、毎晩、そんなうまくえさだけ取られるはずがない。

どうも、このねずみ捕りめは、ねずみからわいろをもらったらしいぞ。」

「もらわん。もらわん。あんまり人を見そこなうな。」とねずみ捕りはどなりましたが、もちろん、下男の耳には聞こえません。きょうも腐った半ぺんをくつつけていきました。

ねずみ捕りは、とんだ疑いを受けたので、一日ぶんぶんおこっていました。夜になりました。ツエねずみが出て来て、さも大儀たいぎらしく言いました。

「あああ、毎日ここまでやって来るのも、並みたいいのこっちゃやない。それにごちそうといったら、せいぜい魚さかなの頭だ。いやになっちゃう。しかしまあ、せつかく来たんだからしかたない。食つてやるでしょうか。ねずみ捕りさん。今晚は。」

ねずみ捕りは、はりがねをぷりぷりさせておこっていましたので、ただ一こと、

「お食べ。」と言いました。ツエねずみはすぐプイツと飛びこみましたが、半ぺんのくさっているのを見て、おこつて叫びました、。

「ねずみとりさん。あんまりひどいや。この半ぺんはくさってます。僕のような弱いものをだますなんて、あんまりだ。まじ償つてください。償つてください。」

ねずみ捕りは、思わず、はり金をりゅうりゅうと鳴らすくらい、おこつてしまいました。そのりゅうりゅうが悪かったのです。

「ピシャツ。シインン。」えさについていたかぎがはずれて、ねずみ捕りの入り口が閉じ

てしまいました。さあもうたいへんです。

ツエねずみはきちがいのようになって、

「ねずみ捕りさん。ひどいや。ひどいや。うう、くやしい。ねずみ捕りさん。あんまりだ。  
。」と言いながら、はりがねをかじるやら、くるくるまわるやら、地だんだふむやら、わめくやら、泣くやら、それはそれは大きすぎです。それでも、償ってください、償ってください、もう言う力がありませんでした。

ねずみ捕りの方も、痛いやら、しやくにさわるやら、ガタガタ、ブルブル、リュウリュウとふるえました。一晩そうやってとうとう朝になりました。

顔のまつ赤かな下男が来て見て、こおどりして言いました。

「しめた。しめた。とうとう、かかった。意地の悪そうなねずみだな。さあ、出て来い。

こぞう。」



# 青空文庫情報

底本：「童話集 銀河鉄道の夜 他十四編」岩波文庫、岩波書店

1951（昭和26）年10月25日第1刷発行

1966（昭和41）年7月16日第18刷改版発行

2000（平成12）年5月25日改版第71刷発行

入力：のぶ

校正：noriko saito

2005年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ツエねずみ

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>